九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

マッチーニと青年イタリヤ

讃井，鉄男

https://doi.org/10.15017/2344401

出版情報：史淵. 12, pp.145-168, 1936-03-10. 九州帝国大学法文学部
バージョン：
権利関係：

マッチーニと青年イタリヤ

讃井鉄男

「青年ヨーロパ（la Giovine Europa）。それは十九世紀に於ける自由の野である。イタリヤはその旗を此の共通の野に打立てねばならない。イタリヤの軍團はフランス。ベルギー。ポーランドの軍團と並んで隊伍を整へねばならない。」（マッチーニ）七月革命の後一年を經すして、未だドイツ、スウイス、の軍團を語る以前に此の言葉を友人に語つた人、ジュセッペ、マッチーニ、が自由民族の親愛の思想の爲に說き、闘ひ、苦しんだ事は未だ何人にもその比類を見ない。彼はその世界主義的希望を、之と調和せしめんとした國民的獨立の思想に屢々慘めに齟齬せしめられたに拘はらず、決して放棄しなかつた。彼は屢々手段を誤まり、度々現實の理解を忘却した。然しその誠心誠意が不動の信念の泉より流露し來る不屈不撓の活動家には彼の祖國の歴史のみならず、當時の一般歐洲史に於ける一の主要なる位置が與へられねばならない。①

クローチェがその近著「十九世紀歐洲史」の中で言つてゐる樣に、②七月革命以後のフランス優越の思想には自ら顧らるべき兩面があり、その一は、分裂せる、無力な諸國民が强力な武斷國家の抑壓の下に

あつて、アルプス山上に友朋の旗が現れ、鐵紐のいづこかを斷ち鋒起を助ける者の出現を渴望したといふ絶望的な事情と、その二は、之等諸國民が自己の力を信ぜざりし誤謬より、轉へつて、最早フランスの優越或は、イニシアチーブを期待せず、自己自ら、への信賴、自らのイニシアチーブへの信賴、倒れて止まず反抗に反抗を重ね最後の勝利の確信を以てする犧牲的度量。實にマツチーニの眞の偉大さは此の眞理の認識と、之に相應しき行動の不屈の決斷とに存する。政治家に操らるゝ政治よりも更に根本的な或物、即ち、人間の中に普遍的な感情、理想を呼び醒まし、各自にあてがはれたるミツシオン、亦之より生ずる義務の意識。及び、信念なき人には不可能に見ゆるものを可能にする此の義務に吾人の全體を捧ぐる事の意識。かくて陳腐なカルボナリに反對して「青年イタリヤ」を建設し、男性的、戰鬪的諸源泉に迄溯り、亦はフランスのイニシアチーブに期待せずしてイタリヤ人及びその他の國民に各自のイニシアチーブを說き、フランスの覇權に對抗して「青年ヨーロパ」を企畫したのである。此の彼の偉大さは道德的偉大さ、信ずる事に生き燃ゆるが如き言葉と實踐とを以て、周圍の人を敎へ導く使徒の偉大さである。其の他の彼の思想は或は彼の獨創に非ず或は曖昧、誤謬に滿ち、例へばイタリヤの共和的統一の思想の如きは既にイタリヤに於ける執政官時代のフランスの政治への失望より一にして不可分のイタリヤ共和國を計畫せるイタリヤ、ジヤコバンの傳統に屬し、唯彼等はマチーニの如く之に宗敎的感情、使徒の熱情を與へず從つて深き根を下すに至らざりしのみ。亦彼の國民觀及び各國民の有する使命觀も亦獨逸の哲學者、歷史家より來り、共通の智的遺產に屬するにすぎず。唯

それがマツチーニによつて促進せられ歐洲的意識に迄普遍化せられたるのみ。彼の唱ゆるフランスの優越に代ふるにイタリヤの優越を以てする思想と雖も、地上より立ち、戰ふ事を要する國民の誇を鼓舞するに必要な神話以上の價値を有せず。此の點に就いては彼以前に既にフランス優越のみならず、同樣な事情の下に論ぜらた獨逸優越の神話あり、亦マツチーニと前後してはジオベルティーの「イタリヤ優越」、チエスコフスキのポーランド優越あり、更にはメルキオル、ヒルツエルのスイスに關する同樣な思想を見る。マツチーニの理論體系も幾多の批判の餘地あり。彼が强き自由への感情に驅られ、自由主義の諸力を以て國民的獨立運動の源泉と見たとはいへ、思索的深さと、歷史的感覺の缺亡は自由の觀念を理論的に構成、演繹する事をさまたげ、事實、理論的に之を危くし、殆んど否認さへした。即ちサンシモン主義より競爭の原理に對立するものとしてアソシアシオンの原理、及び教義、儀禮、規律諸民族の首に宗教會議をもつ人道主義的宗教、詩及び藝術の社會的目的への從屬等、の思想を繼承し、民主的イデオロギーより、全體と部分の間を動搖する漠然たる民衆の思想等を受入れてゐる。

以上の總ての事にも拘はらず、又彼が一貫せる理論家でもなければ政治家でもなかつたといふ事實にも拘はらずマツチーニは歐洲に於ける智的、道德的、政治的力となつた。凡ゆる國々の愛國者、革命家は彼の中に接觸點を見、彼に對して專制的、保守的諸國は間諜、陰謀の凡ゆる手段を盡して常に戰を挑んだ。一八三〇年以後の時代に一の共通の歐洲的意識、一の共通の思想的基礎、共通の判斷、意

見、感情が起り、增大したとすれば、之は確かに唯一人のなせる事に非ず、實に自由主義運動の本質より出で來るものであるが、然し同時にマッチーニは其の宗教的精神の靈感と、イタリヤを初め獨逸、南スラヴ族に至る凡ゆる民族を包括する愛とを以て之に貢獻したと言はねばならない。

サルヂニヤ國王カルロ、アルベルト治世の初期に、マルセイユに於て印刷せられ、此の新國王に宛てられた一通の書簡がイタリヤ愛國者達の間に配布せられ、至る所に於て衝動を捲き起した。國王も勿論之を受け取つて讀んだのである。

「陛下よ。眼を、一の世界を發見するかの鷲の眼を、此の自然の微笑によつてかくも美しきイタリヤ、即ち二千年の光輝ある思出に飾られ、天才の祖國であり、無限の資源に富み、唯統一のみが缺けて居り、かゝる堡に圍まれてゐるが爲に他國の侮を禦ぐには一の强き意志と僅かの勇敢な人々のみにて足る此のイタリヤに向け給はなかつたのか。イタリヤは偉大な運命に定められてゐると、あなたは言ひ給はなかつたのか。あなたは其處に住む民族即ち屈從が頭に投げる影にも拘はらずその生命力、その祖國の神聖さ、或はそれによつても國民が構成せられる粗野な愚かな情熱の力によつて偉大である民族を見給はなかつたのか。不幸にも屈せず、希望を失はざるが故に眞に偉大な民族を。

神が混沌より創り出さるゝ如く、此の分散せる諸要素より一の世界を建設し給へ。分裂せる部分を合一しそれは凡て我物であり、幸福であると言ひ給へ。神が創造者である如くあなたは偉大である。そして二千萬の人々は叫ぶであらう。神は天に在り、カルロ、アルベルト、は地上にありと。（中略）

陛下よ。若しもあなたの魂が偉大な思想に對して眞に死してゐるなら、又あなたが治世の初に當つて祖先の國王達の瑣々たる範位の中に拘はる以外の目的を持ち給はねば、あなたは此處に止まり給へ。（中略）

若しも此の言葉を讀み給ふてあなたの魂があなたが敢て獨逸の領主權の彼方を見られる瞬間に急ぎ行き、あなたの內なる聲が、『汝は何等か偉大なるものとなるべく生れてゐる』とあなたに呼びかけるのを聞き給

ふたなら、おゝその時にはあなたは此の聲に從ひ給ふ。それは天才の聲であり、世紀より世紀へと永遠なるものへ向上するべくあなたに手を伸ばす時代の聲である。それはあなたに全く傾聽する爲に唯一つの言葉を待つてゐる全イタリヤの聲である。

此の言葉を語り給へ。國民の先頭に立ち給へ。而してあなたの旗に統一、自由、獨立、と記し給へ。復讎者、民族の權利の代表者、全イタリヤの再興者たる事を宣言し給へ。イタリヤを野蠻人より解放し給へ未來を創り給へ。世紀にあなたの名を與へ給へ。之と共に新時代を始まらしめ給へ。

（中略）あなたが自らの地位を充分理解せられ一つの高き使命を有すと確信せられ、明朗に斷乎として決斷せられ給ふたならば、あなたは確實な勝利の道を歩き給ふだらう。陛下よ。確信は他の總てに勝る力である。勝利の秘密は意志にあり。

陛下よ。若しもあなたが行動し給はねば他人があなた無しに、あなたに反對して行動するでせう。あなたを治世の初期に祝福したる民衆の歡呼に迷はされ給ふな。此の歡呼の源に遡つて民衆の思想を究め給へ。かの歡呼はあなたの名が廿一年の年を思出さしめた爲に起つたものである。

陛下よ。私は陛下に眞理を語つた。自由なる人々は實行によるあなたの返答を待つてゐる。それが如何であらうとも後世はあなたに對して次の如き判斷を下すだらう、といふ事を考慮し給へ。

人間の中の最初の人であるか、或はイタリヤの暴君の中の最後の人であるかと。

何れかを選び給へ。

—イタリヤ人。③

かくも率直にイタリヤの自由統一への再起の思想を表現せるかのイタリヤ人とは誰か。それは丁度その頃サヴォーナの獄を放免せられたる廿六才の若きゼノアの人、ジュセッペ、マッチーニその人であつた。

一八三〇年カルボナロの嫌疑を以てサヴォーナの獄にあるや「少さな格子窓より眼を放つ時に目前

に横たはる、自然の我等に示す二つの無限性の象徴、最高の對象、たるあの「空と海」とにかこまれた高き塔の一室に、聖書、タキツス、バイロン、を坐右に、孤獨な幽閉の中に冥想、思索、したものは祖國の獨立の爲の「青年イタリヤ」(la Giovine Italia)の計畫であつた。而も彼の思想は自らの祖國のみに限らるべきものでなく、伊太利人が先づ旗を掲げて他の國民を指示、教導すべきである。今や彼の深き思索は新たに建設さるゝ「青年イタリヤ」を導く、宗教的、道德的諸原理であり、カルボナリスムは彼の高き指標とすべき目標を與へざる物として排斥せられ、唯に外國の羈軛よりの祖國の解放、のみならず國內專政君主も滅さるべきであり、又同樣に數世紀以來伊太利の癌たる法王權も倒さるべし。燃ゆるが如き祖國愛にも拘はらず、彼の思想は奴隷の境地に苦しむイタリヤ民族のみに向けらるゝに非ずして、彼の全努力を導く主要精神は即ち祖國が諸國民の教導者となる事である。即ち彼の言葉によれば『伊太利人は歐洲の爲の新生活のイニシアチーブをとる』事である。

その深き宗教的精神にも拘はらず彼はカトリツク教の中に眞のキリスト教の歪曲を見、彼の求めてやまぬものは誠のキリスト教精神に貫かれた宗教であり、之こそ諸國民に自由を與へるだらう。世界が永い間宗教的信仰の燈明臺として眺め來つたロ！マは新しき、より高き信仰の炬火をかゝぐべきである。故に法王權の束縛より永遠の都を解放する事が高き聖なる使命であり、之によつて同時に他の諸國民も初めて彼等を苦しめる恥ずべき鎖より解放せらるゝだらう。マツチーニは後に次の樣に語つてゐる。

「私が若き時に、歐洲の新生活のイニシアチーブは吾等民族の心、行爲、犧牲心、より生ずと信じた時、私は私の中に再びローマの强き聲を聞いた。私の聞いたその呼聲は愛すべき尊敬を以て諸國民に認められ、彼等の心の中に保存せられ、全人類の爲の道德的結合、盟朋を告げるだらう。私はローマが神と共和的イタリヤの名によつて、諸國民に一の共通の目的、一の新宗敎の基礎を贈るのを見た。又私は歐洲が如何に懷疑主義、自我主義、無政府狀態、に倦きて新しき信仰を熱烈に歡迎したかを見た。之がサヴォーナの一少獄房に於ける私の考であつた[4]」又他の所に記して曰く、

「私の最初の祖國の夢を照らしたる幻は私自身の生活に關する限りは消へ失せた。私が確く信ずる如くたとへ此の幻が實現せられたとしても、私は既に墓中にあるだらう。かゝる思想の故に私は一生涯中、ユートピスト、無思慮者と呼ばれ、同時に屢々幻滅せしめられ、惱まされたので、私は海と天との間に、人間の接觸から離れてある、サヴォーナの孤獨な獄房を屢々憧憬と苦惱の心とを以て追想する。[5]」

此處に彼の說く一にして、分ち難き、民主的共和國の首都ローマは法王のローマに非ずして「神と共和的イタリヤの名に於て諸國民に共通の目的、新宗敎の基礎を贈る」べく定められた「民衆のローマ」Ia Roma del Popolo の謂である。何となれば彼にとつては、イタリヤの事は人類の事であり、いつの日かカピトールの岡より友朋の焰、「神と民衆」Dio e popolo といふ救濟の言葉が告げらるゝであらうから。

ジェノアの共和主義者は此處に古のフロレンスの王權主義者の口調を以て語つてゐる。此のネオ、

ロマン的信條はダンテのデ、モナルキアを想はしむる。法王の都市ならざる世界的共和國の中心ローマは諸國民を集めて信仰と權威、即ち人間の完全性への信仰と、永遠の都市の靈に固有の權威に耳を傾けしむる。之一の夢、榮やかな夢と人は言ふだらう。而も之は彼の終生變らざる信念であつた。

このマッチーニの第三のローマ Terza Roma の思想はオットー、フォッスラーがその著、「時代の精神的潮流より見たるマッチーニの政治思想」⑥ に指摘してゐる樣に、サンシモン主義に影響せられた思想である。マッチーニはサンシモン派がその歷史哲學に於て、死に瀕せる無信仰な個人主義的時代に對して新に始まりつゝある社會的時代即ち個人よりも社會、神の欲ずる共通の進歩、自由、統一的信仰の人類の理想の時代の出現を說いた事に從つて「青年イタリヤ」を以て二つの敵對する時代、原理の間の極めて人間主義的、倫理的戰に於て反動的諸勢力と對立せしめ、此の新時代の指導者をフランスとなしたサンシモン派とは反對に、彼は寧ろ、フランスのヘゲモニーに對抗して、第三のローマ Terza Roma の普遍的、道德的支配權の思想を導き出し、サンシモン派が來るべき時代を第三の有機的時代となし「エルサレム」「シーザーのローマ」「キリスト敎世界のローマ」を以て人類の三つの指導的都市となせる思想に從つて、マッチーニはシーザー。法王。のローマの後に「第三のローマ」が新時代に全民族を一の社會に集むべしと考へたのである。之は後のジオベルテイーのイタリヤ優越論と類似せる點がある。かくて「青年イタリヤ」の目的は祖國のみならず、總ての苦惱、分裂せる人類を解放するに在つた。

證據不充分の爲に一八三一年初に亡命のパンを選んだ時上述の如き思想を抱きつゝ、ゲンフを經て當時イタリヤ人がサヴオイ侵入を企てゝゐるリヨンに赴き、之が失敗するやコルシカに赴いて中部イタリヤの鋒起を助け塊の抑壓を見るや、遂にマッチーニは活動の本據をマルセイユに選んだ。此處にパルマ。モデナ。法王國等より來れる多數の亡命者が彼の共和的青年同盟建設に協力し、前掲のカルロ

アルベルト王への公開の書簡の記されたのは丁度此の頃の事である。(一八三一年五月或は六月)「青年イタリヤ」建設と同時に同名の機關紙の第一輯が公けにせられたのは一八三二年三月十八日であつた。

「青年を鋒起せる民衆の先頭に立てよ。之等の若き人々の中に如何なる力が潜むか、青年の聲が群集に對して如何なる魔力を有するかを人は知らない。人は彼等の中に新宗教の爲の使徒の群を見るだらう。然し乍ら青年は活動に生き熱情と信仰とに成長する。一の莊嚴な使命によつて彼等を淨めよ。競爭と稱讃とを以て彼等を燃へ立たしめよ。彼等の間に火の言葉と靈感の言葉を擴めよ。彼等に國家と、榮光と、諸々の偉大な追憶とを語れ」[7]

かゝる「青年イタリヤ」黨運動の性質をよく窺はしむるものは次に掲ぐる黨員の誓言[8]と同黨の綱領[9]である。

青年イタリヤ黨員の誓

神とイタリヤとの名に於て。外國亦は國内の暴君の下に倒れたる聖なるイタリヤの爲の總ての殉教者の名に於て。

私を祖國及び神が私に送れる兄弟達に結びつける義務によつて。私の母に生命を與へ、而して私の子供の故郷となるべき國土に對して私が持つ、凡ての人間に天賦の愛によつて。私が惡、不正、簒奪、暴政に對して抱く、凡ての人に天賦の憎惡によつて。私が他の國土の市民の前に立つ時に、私は市民としての何等の權利も、又何等の祖國も國旗も有せずとの確信を得たる時に私の顔を彩る赤面によつて。私がその爲に使命を有し而もそれを行使する事の出來ない(私の魂を戰かせる)かの自由への衝動によつて。それを

追求する爲に私が生れ、而も奴隷の如き無力によつてそれに到達し得ない高き善によつて。我等の過去の偉大さの追憶、我等の現在の屈從の感情によつて。絞首臺上にて、獄中にて或は亡命にて倒れたる子供の爲に流すイタリヤの母親達の涙によつて。幾十萬の人々の苦惱によつて、私は此處に宣言する。

神によつてイタリヤの土地に委ねられた使命とそれを果す事を努力すべき總てのイタリヤ人の義務を私は信ずるが故に、神が一の國民が存在すべしと命ぜし所には、神は亦それを實現するに必要な力を與へ給ふ、此の力は諸民族に與へられて居り、それを民族によつて、民族の爲に正しく用ふる所に勝利の秘密は存すとの確信を持つが故に、且又德とは活動、犧牲的勇氣、力、統一、堅忍に存すとの確き信念をもつが故に、私は青年イタリヤの爲に、同一の信仰をもつ人々の同盟に此の身を捧ぐ。而して一の統一せる自由なる獨立の共和的イタリヤを作るといふ、彼等との共同の努力に自ら、全く、永久に此の身を捧げ、言葉によるにせよ、行動によるにせよ、私の力の及ぶ限りの手段を以て青年イタリヤの目的の爲に、又その目的實現の唯一の手段たる協同の爲に、或はそれのみが獲得せられたるものに永續性を與へ得る德の爲に、私のイタリヤの同朋を敎育し、如何なる他の結合にも參加せず、青年イタリヤの精神に合致し、私と共に共通に私のイタリヤの同朋の結合を代表する人々より私に與へられたる凡ゆる指令に服從し、この指令の秘密は私の一命にかけて守り、私と共に同一の同盟に屬する兄弟達を忠告と、行動とによつて助ける事を——今こそ而して永遠に Ora e sempre——誓ふ。

之を私は誓ひ、而して萬一私が此の誓の全部か一部かを裏切つた場合は私は自らの頭上に神の怒り、人間の憎惡、僞誓の恥辱を呼びおろすであらう。

青年イタリヤ黨綱領

（第一條）青年イタリヤは進歩と義務の理法を信じ、伊太利は一國民となる運命を有すと信じ、——伊太利は一國民となるに充分の力を自らの中に有すと信じ、かつての努力の不成功は伊太利の弱さによるに非ずしてその中にある革命的要素の指導の宜しきを得なかつた事によると信じ、——又力の秘密は努力の不斷性と統一性に存すと信ずる伊太利人の盟朋である。彼等は思想と行爲とを、伊太利を自由人と平等人との獨

立の主權的國民として再組織するといふ大目的に捧げるといふ強き意圖の下に此の團体に參加する。

（第二條）伊太利とは、(1) 大陸及び半島伊太利であり、北はアルプスの最高連山彙線、南は海、西はヴアロ河口、東はトリエストを以て界とする。(2) 住民の言語によつて伊太利人であると證明され、特殊の行政的組織の下に伊本利の政治的統一を形成する運命を有する諸島嶼。

國民とは共通の盟約によつて結合され同一の法律によつて支配さるゝ伊太利の普遍体である。

（第三條）團体の基礎……この團体の目的は革命である。然しその勞作は特に教化的である。從つてそれは、國民教育を指導し、伊太利に安寧と更生との希望を與へる如き諸原理を宣言する。

青年イタリヤは共和主義者にして統一主義者である。

何となれば君主的要素はそれ自らでは人民的要素と並んで自らを保持する事が不可能であるからそれは必然的に不平等と全國民の頽癈の因たる貴族階級といふ仲介的要素を包含するから。

何となれば中世に於ける如く王朝が今や消滅せる神聖なる權利の信仰に基礎をおかざる時には、國家に於ける統一と權威の結組となるにはあまりに弱くなるから。

何となれば歐洲に起れる一連の進歩的變革の不可避の傾向は共和的原理の君臨に向ひ、且又伊太利に於ける王朝的原理はやがて新革命の必然性を緒ひ來るだらうから。

青年イタリヤは、伊太利には實際に王朝的要素が存在せざる故に、共和的である。王冠と人民との間には直接の位置を占むるところの有力にして尊信すべき貴族を缺く。榮光、或は國民の發展に對して盡された重要なる奉仕の傳統を持ち、種々の國家の同情、親愛を支配するが如き君主をもつ伊太利王朝を吾々は有せず。

我等伊太利の傳統は本來共和的であり我等の偉大なる記念は共和的であり、我等國民的進歩の歴史は全て共和的である。故に王政を吾國に建てる事は忽ち疲弊となり、外國との不斷の屈從關係のために吾國の衰滅を招來す。國民の福利に反すると共に國民の統一にも反するものである。青年イタリヤは統一主義者

である。何となれば聯邦組織は瑞西の如き政治的不能狀態に伊太利を陷れ必然的に之を隣國の何れかの勢力の下におくものである。この組織は各地方の爭鬪をおこし伊太利をして中古の狀態に還らしむるものである。同組織は伊太利大家族の結合を破壞し去り、以て伊太利が人道の爲に完成すべき大使命の根蔕を覆すに至るものである。而して今や歐洲は漸次に且つ不可避に歐洲社會をして一の廣汎にして結合せる集團たらしむべく誘導するところの變革の進展の中に存在しつゝあるのである。（中略）この主義卽ち吾等の協同の基礎にして且つその直接の結果たるところのものは、實に青年イタリヤ黨の信條を形成す。この信條を承認し且つ確信する者にして初めて吾等の協同に加入する資格がある。

（第四條）ゲリラ戰法を以てする擾亂は、實に外國の制壓より解放されん事を希望する總ての國民にとつての鬪爭の方法である。この方法は擾亂の當初には當然缺亡せるところの正規の軍隊を次第に建設補充し、戰場に最多數の兵員軍資を送り出し、而も最少の維持支給を以て足るものである。國民の軍事敎育を成立せしめ、鬪爭の記念を以つて、國土の凡ゆる部分を貢獻し得るものである。ゲリラ戰法を以て各地方能力の活動の素地を拓き敵に不馴れの戰法を强制し、大敗北の禍害を豫防し、國民的戰鬪を詭謀の禍より免かれしめ、軍事行動の一定規の形態に限定されざる利益を有せしむ。（中略）青年イタリヤ黨員は皆彼等自身之等擾亂の主義を傳播する事に奮勵すべし。

「青年イタリヤ」の建設を以て近代イタリヤの國民思想は初めて無力な憧憬と夢想の域を脫して實際的政治の領域に入つた。マツチーニの理想は必然的に過去イタリヤの情勢と、七月革命後の一般の歐洲的危機と密接に關聯するものである。顧るに、一八二〇年、一八二一年は個々國家の少範位内に改革が試みられたに過ぎず、一八三一年の鋒起は近隣の國家への干涉を避ける事に効め、之等三度の鋒起は何れも墺に抑壓せられた事に鑑み、マシチーニは全イタリヤに亘る鋒起を誘致して自由統一を阻む墺に對抗せんとしたのであり、且又此の際イタリヤの諸君主への信賴提携を期待しなかつたのは一

八二〇年一八三一年に反動的反國民的な諸君主に裏切られた辛い經驗を見た爲である。かゝる事情の下にマツチーニは國民的プロゲラムを可能にする爲に共和政を選び、諸君主の代りに民衆に依頼した。イタリヤ的共和的統一運動は來るべき歐洲的擾亂に於て全歐の革命的要素に支持せらるゝだらうといふ彼の考は夢想に過ぎなかつたとしても、イタリヤ統一的共和國の思想によつて國民的傾向と自由主義的傾向とを力强く結合して反對的諸勢力に對抗せしめたのであるが、この傾向は後のネオ、グェルフィー、或は一八四九年以後のピエモント派にも採られた傾向であり、統一運動の勝利に貢献する所大であつた。而も彼がジオベルテイー。ヴイクトル、エマヌエル。と異り、民主的方面を重んじたのも、從來の諸革命の缺陷を補はんと志したものであり、外國殊にフランスの支持を拒んだのはロマーニヤ革命の失敗、コスモポリタン的カルボナロ等を考慮したからである。マツチーニの理想實現の可能性は此處に論ぜずとも、以上によつて知らるゝ如く「青年イタリヤ」の計畫は單なる抽象的非政治的思想家の表現でなく、寧ろ現實を顧慮した實際政治的傾向を多分に含む事が顧られねばならない。

前掲のオツトー、フォツスラー。の著書にも述べられてゐる樣に、[10]「思想と行動」Pensiero e Azione は「青年イタリヤ」の標語であり、祖國の爲に戰ふと共に、敎へる事即ち政治鬪爭を精神的更には宗敎的なものへ迄高めんとした。かく道義的手段を愛國的目的に適用する事は、イタリヤの古き傳統であり、イタリヤ國民思想の第一の特質は文學との結合である。政治的無力のイタリヤに於ける、ダンテ。ペトラルカ。カルドツチー。ダヌンツイオ。に見らるゝ詩的文學的人文主義的傾向の如く、

殊にアルフイエリ。フオスコロ。その他の國民詩或は一般歐洲の自由主義文學の影響の下に、マッチーニの政治態度には政治的弱者、理想主義的觀念的義俠、犧牲心、崇高な感情の幻想的感傷が一貫して流れてゐる。マッチーニの政治思想を養つた第二のものは、更にイタリヤ的なローマ的カトリツク的思想であり、政治的意欲、行動を形而上的倫理的理念によつて規定し、彼岸的原理を現在政治への考慮の上にをかんとする、カトリツク的の謂である。

此の他、フランス革命思想とロマンチツクとの影響をも多く受けてゐるが、殊に後の「青年ヨーロツパ」の思想を暗示したものとして、マッチーニの政治と文學との深い關係が顧られねばならない。[11]既に早くより、彼はロマンチツクの、詩人と政治との結合の思想を採つて、傾向文學の色彩を深くし次第に尙古派、浪漫派を越へて、藝術の限界を擴大し、更に彼のイデオロギーの哲學的普遍的高揚と共に、文學に對して彼の要求する役割の普遍的高揚がなされ「リラを手にした哲學者」即ち哲學詩を最高の詩となし、詩人を「人間世界を動かす普遍的法則の解釋者」と呼んで歷史哲學的傾向を深め、新浪漫的『社會的』な青年ヨーロツパの文學の特質を示してゐる。更に重要な事は「ヨーロツパ文學論」(一八二九年)に於てゲーテの世界文學論に言及して、Tendenza europea を說いて、後の「青年ヨーロツパ」の思想を暗示してゐる點である。

「佛蘭西の海港都市(マルセイユ)に於て私は、二十年の間送つた樣なあの孤獨の生活を送つた。少さな部屋の壁に圍まれた自由意志による幽閉の生活。私は働き續けた。唯一人で。事務室もなく。手

傳もなく。日も夜も記事や手紙を書き、旅行者を迎へ伊太利の水夫等と交を結び、印刷された記事を疊み、荷作をし、かく精神的活動と筋肉勞働との間を熱心に働いた。他の幾人かの同志と私は兄弟の樣に生活した。我々は同一の希望。思想に結ばれ我等の努力に對する執着の故に他の國々の共和主義者達に愛せられ、讃嘆せられて。屢々——何となれば吾等は僅かの金を持つのみであり、之を以て總ての支出にあてゝいたから——吾等は極度の貧困にあつた。而も吾等は未來に對する信賴の微笑を唇に浮べて常に一同快活であつた。一八三一年—一八三二年の二年間は私のなし得た內の最も純粹な献身の年であつた。」[12]

當時の彼の生活を彷彿せしむる言葉である。この二年間に於けるマツチーニ及び之を助ける少數の愛國者達の活動は實に目覺ましいものであつた。名もなく富もなく指導者マツチーニを除いては左程の才能もない少數の青年達は祖國の將來を變革する事を計畫し、一大勢力、墺との戰を準備しつつあつた。傍觀者にはそれは狂人の夢と見へたに相違ない。指導者マツチーニの强き信念に導かれて、同志一同は何物をも成就し得る事を確信しつゝイタリヤ半島全體に汎つて同情者と文通し陰謀の網を擴げつゝ機會を見出す情に「青年イタリヤ」結社の支部を設けつゝ熱心に働いた。(「青年イタリヤ」結社の組織は Berkeley, Italy in the making 1815—1846. 1932. に詳し。)[13]

その弘布狀態を見るに、マルセイユより梱に結められた機關紙は間道を通つてゼノア。リヴォルノ。チヴタヴェツキアに送られて同志の手に渡り、マツチーニの故國ピエモントでは政府の不安定に乘じ

て宣傳の種はアレサンドリア。チユーリン。シャンベリに播かれ市民階級のみならず、軍隊にも贊同者を獲得し、ロンバルト、ヴネヱチヤ王國では、ミラノ。マントワ。プレスチア。クレモナに同志を獲、此の頃公けにされたシルヴィオ、ペリコの獄中記（Le mie Prigioni）はマッチーニ教說宣布者の道を開き、政府の溫健さにより人民を動かす事の容易に見へたトスカナにても幾らかの支持を得、リヴォルノ。フロレンス。スィエナ。にコングレガシオン設けられ。ピサの學生も參加し、法王國にては最もよい宣傳の地盤が見出された。然るに一方半島諸國は次第に陰謀の網を破壞せんとし、塊に率先せられて迫害の手を擴け巧みな間諜、或は裏切者の報告は官憲の仕事を容易にし常に變裝して僞の旅券、僞名、をもつて活動するマッチーニの計畫は屢々彼自身の手紙から官憲に洩れ、從つて色々の企は事前に發覺した。一八三三年春のピエモントの最初の國民的鋒起もさうである。伊太利亡命者は此の鋒起をザヴォイ侵入によつて支持する手筈であり、同時に佛の共和派も鋒起する事が企てられ、ゴツドフロア、カヴェーニヤツク。アルマン、カレルその他既に波蘭の亡命者、獨逸の急進派との交通もあつた。[14]

四月の此のピエモント暴動失敗の結果、カルロ、アルベルト王の行つた慘酷な處分、マッチーニの親友ヤコボ、ルツフィニの獄中に於ける自殺等は當時一世の耳目を聳動せしめた悲慘事であつた。一方前年の九月以來、マルセイユに隱れてゐたマッチーニに對して佛政府は追放の命令を發し、彼の出版を禁止したにも拘はらず彼は秘密の出版所を起し、フランスの植字工の協力を得、自らは好意ある一

佛人の許に身を隱した。マツチーニ運動斷壓を充分行ふ事の出來ない爲に、マツチーニを以て暗殺を煽動する者といふ誹謗の噂を佛政府が流布せしめたのも此の頃である。

一八三三年七月初マツチーニはジユネーヴに移りサルジニヤ暴動の失敗に屈せず新たな鋒起の計畫を練つた。マツチーニのスゥイス滯在は實に自由改革運動の制壓に苦心する墺、普等東歐列强の寒心する處ゝ る。波蘭革命を起して逐はれた人々、獨逸自由改革論者の逃げ來れるもの、之等は多くスゥイスに集まつて保守主義を以て立つザルネル聯合以外の主要カントンに於て自由に且つ幾分の保護をも受けつゝ生活してゐた。マツチーニ及びその黨員が青年イタリヤ黨再起に關して之等革命亡命者又自由改革論者に期待し、之等の人々が青年イタリヤ黨に期待した事は事の自然である。かくて「青年イタリヤ」黨は國際的國土たる中立國スゥイスに於て再起する事が出來た。歐洲の大半は革命に瀕して居り、伊太利に於ける共和運動は佛蘭西、スペイン、獨逸の共和的鋒起の炬火となるだらうと彼は信じてゐた。之は恐らく空想的な夢であり彼の希望は誇張に過ぎたであらうが、一の暴動は全伊太利に擴まるだらうと信ずる確かな根據は存在して居り、且又「青年イタリヤ」の與へた革命的精神は深い根を置いた事は事實である。巴里のカルボナロの計畫を採り鋒起の出發點をサヴオイに選び、スゥイス國境にある獨逸の亡命者、就中ベルンにある波蘭の亡命者の援助を得、サヴォイの軍隊を參加せしめ、革命軍はアルプスを越へてピエモントに侵入し一方他の部隊はリヴィエラに上陸しゼノア地方を鋒起せしむる考であつた。

一八三三年秋迄にはスゥイスに於て數百人の亡命者が徵集せられ、その多くは波蘭人、獨逸人であり少數の佛蘭人がゐた。「一地點の鋒起には直ちに他の總ての地の鋒起が繼起するだらう。伊太利は共和的歐洲に衝擊を與ふべきである」といふ當時の彼の言より見れば此の擧によつて民主主義者の國際的提携を形成し之を「青年歐洲」に迄發展せしめんとした事、即ち彼の後日の「青年歐洲」樹立の企圖は既にサヴォイ擾亂の計畫の時に、彼の意中に存したものであり、青年イタリヤ黨は既に國際的性質を帶び來つてゐた。

今此處には此の擾亂の詳細は述べず、サヴォイ侵入の指揮者に擬せられたポーランド革命家ラモリノの裏切等の理由で此の企は全く失敗に歸したが唯このサヴォイ擾亂が、中立國スイスに於て計畫され且つ各國の自由改革論者、革命亡命者を糾合した事と、それが既に國際的な計畫であつた事とに於て列强殊に爾來波蘭、伊太利、獨逸に於ける諸革命を抑壓せんと努めてゐた諸國の關心事となつた事は注目に値する。

スゥイスが七月革命の影響として起れる諸國の革命及び自由改革計企の亡命者の避難者として且又青年イタリヤ黨のサヴォイ擾亂の如き凡ゆる反抗の策源地としてその國際的位置を有し、その中立的性質を有する事は、自由改革運動の制壓を志す、メツテルニヒ、システム下のロシヤ、オーストリヤ、プロシヤにとつて何等かの手段を以て之に干涉すべきところのものである。此の所謂東歐三强國のスゥイス內政干涉方針に對して所謂西歐二强國たる佛蘭西、英國がその國內政策に立脚する不干涉主義

を持する事は、此處に干渉不干渉主義の問題を以て兩列强の對立の關係を生ずる事となる。此の對立關係の推移は自由主義の發展の上に契機を與へ、從つて歴史の發展の上の契機となる。⑯

ザヴオイ擾亂後列强のスイスに對する干渉激烈となり多數の亡命者は國境外に逐はれ、或は身を隱したがマツチーニは自己の活動の爲にはイタリヤの近くに居る事の必要と、且又スヴイスの地そのものに對する愛惜の情の爲に此處を去るに忍びず、殆んど三年の間追はれて屢々、ローザンヌ。ベルン。ソルール。ビエンヌ。グレンヘン等とその居を移し、身心共に皮勞し、亡命の凡ゆる辛慘を嘗め盡した。即ち此のスヴイス時代にマツチーニの生活は一大危機に遭遇し、こゝに彼の思想、感情の推移に於ける一大轉期が來るのである。

「生きる事は嵐を胎んだ空、死灰の如く陰慘で沈滯してゐる。名狀し難き苦惱、涙にも言葉にも漏らし難く、冷淡な感傷家にのみ詩を與へる苦惱、人を蒼白にし頰を削らしむるが、而も之を殺さぬ苦惱。人を屈せしむるが、而も挫かない苦惱。而も一方、物倦い眼は心のエデンの扉を守る氷のケルビン永遠無窮のアルプスを越へて祖國の空に棚引く雲を眺めつゝ。」⑰

「此處での私の生活は苦惱を極めた懷疑の時代、即ち偉大な使命に身を捧げ、同朋の幸福の爲にのみ戰ひ而も彼等を幸福にし、慰める事に身を捧げてゐる同時代の人々に誤解せられ、見放され、誹謗せられる人の生活に避け難きあの時代の一つである」⑱

自らの安靜と幸福とを偉大なる思想に捧げ、不幸な祖國の救濟の爲に苦惱に苦惱を重ねた後に彼の知つた事は多くの彼の友人すら彼を理解しないといふ事であつた。

「呼鳴人は他人の心の動きを如何に覺り得ない事であらう。私に最も近くゐた人々でさへ、私が憂に閉され

考へに沈んでゐる時、私は祖國の衰亡、破れた希望、失つた子に涙を注ぐ母親達、アレサンドリヤ。セノア。シャンベリ。に於て銃殺された青年達の事を考へてゐる事を知らない。祖國を死より目覺めさせ、數世紀の塗炭の苦より解放し、あの犧牲を死に捧げんと試みたのは私のあやまちだつたと考へる時私の魂の中に自ら悔恨の忍びよる事を彼等は了解しない。」⑲

かくて彼の送つた暗澹な日夜は屢々疑惑と自殺の境をさまよつたと自ら語つてゐる。而も遂に彼の偉大な魂は再び此の深淵より立ち上り、猶此の地上に高き使命を果さねばならぬとの考は再び強く彼を未來に向はしめた。

「人生は一のミツシオンであり、從つて義務はその最高の律である。彼のミツシオンを理解し、此の義務を果す事に將來の進歩の手段存し、吾等が此の世の生存の後に淨められる生命段階の秘密存す。人生は不滅である。然し乍ら人生が通過する發展の樣式、時は吾等の手中に存す。」⑳

生の終に至る迄人類の進歩の爲に戰はんとする決心を定めて更に曰く、

「私の此の世の個人的生活の凡ゆる快樂、凡ゆる希望と永遠に悲しく別れを告げた。然し乍らあの時以來一瞬と雖も、不幸が行爲の上に影響を及ぼし得ると考へた事はない。私は此の頃私に與へられた慰めに對して敬虔に神を祝福し、かくして生の壓迫と戰ふ力を獲た。」㉑

之等の言葉は後に、有名な「人間義務論」Doveri dell' Uomo（一八四一年）㉒として礎きあげらるゝ思想の萌芽である。此の革命家の道德的理想が吾々の注意を惹くのは、その獨創性によるのでなく、それが彼の個人的體驗、告白であり、其處に純粹に革命家の面目が躍如として、彼の高貴な、眞摯な倫理的精神が現はれてゐるによる。

「若しも人生がミッシオンでなく、目的を持たなかつたとしたらそれは何であらう。そして何故それを神は吾等に與へられたのだらう。人生は一のミッシオンであり。德は犧牲である。この二つの確信なくしては私はもはや存在しないだらう。……

義務は時勢にも、困難にも左右せられず。……成功する事は問題でなく、否々、信念を持ち之を說き而して死する事こそ肝要である。吾々は吾々の義務を果し、他の事に關心しない。

私は此の世の凡ての快樂に別を告げた。永遠に。……そして今は、私の爲に死せる少年時代の一友人の幻と赤裸な義務のみが殘つてゐる。私の周圍には或る呪が取りかこんでゐる。之を解かねばならぬものは私のみである。……

今や私は運命に直面して居る、私のみ之を保持する。神々は私に義務を殘された。私は自分に絕望した後でさへも之等の義務を果す事が出來るだらう。私は犧牲と私の良心とに拘束せられてゐる事を感じる。然しながら私よりも、もつと強い何物かゞ私にあてがつた役目を私は命の續く限り持ち續ける事が出來るだらう。」(23)

高き理想實現の爲の此の自己放棄、此の倫理的勇氣、人生の快樂を放棄して、周圍の世界に動かされず最後まで自己の良心の指示する荊棘の道を進んだその氣象、史上稀に見る人格と言ふ事が出來る。

サヴォイ侵入失敗の後一八三四年四月十五日自由、平等、人道の標語をかゝげて伊、獨、波の十七人の亡命者と共に「青年ヨーロッパ」la Giovine Europa(24)が組織せられた。之は最近の事實上の失敗に對する一種の精神的代償であり、彼等のプログラムの冒頭には「唯一の神、唯一の支配者。神の律、この律の唯一の解釋者、—人類。といふ信條がかゝげられ、夫々國民的獨立を保待しつゝ共和的同志の攻守同盟を作り、共同に同じ目的を目指し、萬人の幸福の爲に義務實行によつて特權、專横、利己主義

を打破し、自由な主權的諸民族を一つの共和的同盟に參加せしむる道を開かんと企てた。その組織は略「青年イタリヤ」に類似してゐる。

「青年ヨーロッパは一の宗派でなく、一の協同體である。それは破壞を目的とするのみならず更に重要な建設を目指す。それは政治的思想を弘布するのみならず人間活動の凡ゆる方面に亘るべき革新の原理への信仰を弘むる。」

「各民族は皆人類の普遍的ミッシオンを滿す事に貢獻すべき特殊のミッシオンを有す。このミッシオンが彼等の國民性を形成する。國民性は神聖である。」かくて祖國と人類とは一の解き難い結紐にて結ぼれねばならなかつた。此の廣大な變革企圖が少數の青年亡命者の仕事である事を思へば之は全く夢の如きものゝ如く思はれる。マッチーニ自身も後にこの計畫が實際的結果に達するにはあまりに廣大である事を自ら認めてゐる。事實、フランス。スペイン。への幾人かの代表者派遣、イギリスに於ける集合組織の企以外は何もなされなかつたが、それは極めて一般の人々の注目を引き民主々義の國際的意義を敎ゆるに充分であつた。而して同時に設けらるべき「青年フランス」「青年獨逸」「青年ポーランド」等との關係を顧れば「青年ヨーロッパ」の歷史的意義も自ら了解せらるゝ筈である。又既に一八二九年の「ヨーロッパ文學論」に關聯して私が言及した如く彼は全歐洲的文學の中に、政治的現實に先行し、之を導き用意する一つの力を認めると考へたのである。勿論全歐洲的文學的傾向のみからマッチーニの歐洲的思想を導き出す事は出來ぬが、「青年ヨーロッパ」の思想は既に早くムッチーニ

の抱懷してゐた考であり、「青年ヨーロッパ」の思想そのものが極めて強く文學的印象に影響せられてゐる事も顧らるべきである。

以上に於てイタリヤ、リソルジメント史上に於けるマッチーニの意義を彼の活動の頂點たる一八三〇年代即ち「青年イタリヤ」より「青年ヨーロッパ」に至る時代に就いて考察したのであるが、今此處には四〇年代に勃興せるヂオベルティー等のネオ、グヴェルフィー運動との關係を考察すべき餘裕を持たない。唯最後に兩運動に關するデ、サンクティスの言葉を引用すれば「兩黨派はその相違を彼等の散文に於て示してゐる。溫和派或は自由派に於ては、分析的文章、口語に極めて近き言葉、單純さ、解し易き演說、推理的說服、イロニイーの使用。マッチーニ派或は民主派に於ては綜合的文章、莊嚴な言葉、華麗な屢々修辭的な語法、毒舌、皮肉。前者は彼等の前に眞の民衆を有し之を敎化せんと試み、後者は想像的民衆を有して之を刺激せんと試みた。然し實際に於ては一方が他方を覆し、根絶せしむる事はなく、寧ろ各々他の足らざる所を補つたのである。」[25]

① A. Stern, Geschichte Europas. Bd IV. Kap VIII. Die Grossmächte und das junge Europa. S. 377.
② Benedetto Croce, Storia d'Europa nel secolo decimo nono. 1932. pp 120—124.
③ Pietro Orsi, Das moderne Italien. ss 96—99.
④ Adolf Friedrich Graf von Schack, J. Mazzini und die italienische Einheit. 1891. ss 25—26.
⑤ Schack, ss 26.
⑥ Otto Vossler, Mazzinis politisches Denken und Wollen in den geistigen Strömungen seiner Zeit. (Beiheft II der Historischen Zeitschrift 1927.) ss 46—51.

⑦ Bolton King. The life of. Mazzini. 1912. p 24.

⑧ Schack, ss 29–30.

⑨ Select documents of European History. Vol III. pp 134–137.

⑩ Vossler, ss 9–15.

⑪ Vossler, ss 15–27.

⑫ Schack, ss 33–34

⑬ Berkeley, Italy in the making (1816–1846). 1932. pp 15–18.

⑭ A. Stern, ss 377–416

⑮ A. Stern, ss 386–395.

⑯ A. Stern, a. a. O. (Die Grossmächte und das junge Europa.) C. Bulle, Geschichte des neuesten Zeit. Bd I. Kap V. (Die Politik der Grossmächte und das junge Europa) ss 255–263.

⑰ B. King, p 53.

⑱ Schack, ss 48–49.

⑲ Schack, s 49.

⑳ ㉑ Schack, s 50.

㉒ The duties of man and other essays by J. Mazzini. (Ever Man Libr). (The duties of man pp 7–125).

㉓ Vossler, a. a. O. (Die Ethik im Dienste der Politik Mazzinis) ss 61–69.

㉔ A. Stern, ss 403–404. B. King, pp 63–64. Vossler ss 26–27.

㉕ B. Croce, p 128.